

## いしかわ動物園 後期破卵を防ぐ取り組みと来季への課題

### 繁殖結果

I ペア：産卵直後に親鳥(雌雄とも)が卵を捨てる行動が続く。しばらく孵卵器に保護した卵を2つ以上戻すと抱卵開始。嘴打ち時期に後期破卵(2個)。

その後第2クラッチがあるが、採卵し560AUの仮親とする。第2クラッチのうち1卵が人工孵化、人工育雛(569I)。

AU ペア：産卵直後にオスによる執拗なメスへの追い回しが発生。第1～3卵が巣内破卵する。第4～6卵抱卵中に巣を放棄したため採卵。人工孵化試みるが中止や孵化直後に死亡(549AU)。

その後第2クラッチ(4卵)があるが、抱卵しないため擬卵とすりかえる。擬卵も抱かず繁殖終了。人工孵化した2羽はAWペア(559AU)、Iペア(560AU)によって自然育雛。

AW ペア：産卵1分後に雄が卵をくわえて捨て破卵(第1～6卵)。第7卵を取り上げ、第8卵とともに2個にして巣に戻す。第7卵はその後落とされ破卵。第8卵は人工孵化し、巣に戻し自然育雛(557AW)。

### 今季発生した問題

I ペア：産卵直後の雌雄による巣外放棄 嘴打ち時期の後期破卵

AU ペア：繁殖期間中(特に抱卵中)のオスによるメスへの攻撃

AW ペア：産卵直後のオスによる巣外放棄

### 2015年に実施した取り組み

後期破卵を防ぐため、I ペアにおいて嘴打ち開始時に幼鳥を同居させる実験を行なった。(本来外敵等を警戒し、嘴打ち卵に執着しないはずの親鳥が、飼育下という単調な環境では嘴打ち卵に執着し、後期破卵が起きていると想定)

第1段階でケージ内同居させたところ、攻撃が激しすぎると判断し、第2段階では緩衝帯に幼鳥を隔離し視覚的な仮想敵とした。

#### 第1段階の時系列変化

4/21 巣内の卵に嘴打ちがみられた

09:45 477I(♂幼鳥)を同居

10:30 ♂激しく追い回し、メスは巣を守る

- 11:00 攻撃が激しすぎるため、477Iを干渉帯へ  
11:10 巢内卵、嘴打ちではなく破卵であった。477Iを幼鳥ケージへ戻す

## 第2段階の時系列変化

- 4/28 第6卵の嘴打ちが近いと予想  
16:30 477Iを干渉帯へ  
4/29  
09:00 第6卵嘴打ち開始  
11:51 それまで緩衝帯の幼鳥を気にしていたが、突然卵を剥き、巢外に捨てる  
12:00 落下した未熟ヒナの死亡を確認

## 取り組みの結果と反省点

第1段階では、同居を試みたものの、オスによる幼鳥への攻撃が続いた。幼鳥の安全を考え緩衝帯に移動させた。結果的に嘴打ちは始まっておらず、腐敗卵の破卵であった。

第2段階では、第1段階でみられた激しい攻撃を避けるため、同居ではなく緩衝帯に幼鳥を投入。♂親は半日に渡り緩衝帯の幼鳥に対して誇示行動をとっていたが、脅威ではないと判断したのか巢に戻り破卵させてしまった。

隠れる場所がなく、スペースも狭い(4.8×9.2m)繁殖ケージ内で幼鳥を同居させたため、攻撃が集中してしまった。次善の策として緩衝帯に幼鳥を投入したが、慣れによって卵の孵化前に♂親の警戒が解かれてしまった。幼鳥が攻撃され過ぎず、孵化前に慣れない策が必要である。

## 2016年の繁殖期に向けた改修

- ・Iペアは、嘴打ち時に幼鳥を安全に同居させるため、ケージサイズを10.8m×9.2mに拡張し、ケージ内に幼鳥の避難場所となるシェルターを設置。シェルターは植栽によって、巢にいる♂親から完全に見えなくなる場所を設ける。
- ・AUペアは、抱卵中のオスによるメスに対する攻撃を防ぐため、Iペア同様植栽を設ける。抱卵交代時に起きる夫婦喧嘩を軽減し、メスが過剰に攻撃されることを防ぐ。必要であればIペア同様幼鳥を同居させ、夫婦の絆を取り戻す。
- ・AWペアは、産卵直後の卵遺棄を防ぐため、営巣行動の活発化を促す。現在使用中のザル型巣台を外し枝組みの上に自ら営巣させる、などを検討。また、AUペア同様植栽を設け、エンリッチメント増大を図る

## 死亡報告

### 個体番号 549AU

(平成 27 年 5 月 7 日生まれ 1 日齢 人工ふ化、 ♀ : 死後 PCR 判定)

#### 経過等

- ・ 自然抱卵中に親鳥によって放棄され、緊急的に孵卵器へ収容していた。
- ・ 5 月 7 日 孵化予定時刻を過ぎても孵化しないため、介助孵化
- ・ 5 月 8 日 人工飼料を受け付けず、急速に衰弱し、12 : 40 死亡

#### 内 景

- ・ 卵黄嚢がピンポン玉大残存  
他著変認めず

#### 死亡原因

- ・ 発育障害による衰弱死

